

人と、地域と、未来をつなげる教育マガジン

# tokiwa



## 特集 明日につなぐ希望 常磐の復興支援

vol.17

October 2011

## tokiwa CONTENTS

特集

### 1 明日につなぐ希望 常磐の復興支援

### 3 就学支援

### 4 心理ケア支援

### 5 学生プロジェクト

### 7 絵本プロジェクト

### 8 文化財の被災状況調査

### 9 学びのTOPIC

各学校組織の最新動向をピックアップレポート

表紙イラストについて

#### 「希望の絆」

今回の震災を通して、たくさんの悲しい出来事がありました。しかしその後、被災地の方々と支援する方々が未来を信じてつながり合い、一歩ずつ復興に向けて進みだしています。学校法人常磐大学も、希望のつながりに加わり、教育機関だからこそできることに今後も全力で取り組んでまいります。今回の表紙イラストは、希望を持ってつながり合う心を表現しました。命、夜明け、羽ばたき…さまざまな希望のモチーフをそこに見いだしていただければと思います。

illustrator 平野こうじ



Japan University Accreditation Association  
UNIVERSITY ACCREDITED  
2010.4~2017.3

常磐大学は平成21年度  
大学評議会の結果、(財)大  
学基準協会の大学基準  
に適合していると認定さ  
れました。



Japan Association for  
College Accreditation  
ACCREDITED  
2008

常磐短期大学は平成20  
年度(財)短期大学基準  
協会による第三者評価  
の結果、適格と認定され  
ました。

TOKIWA

October 2011 / vol.17

発行日 2011年10月  
発行 校舎法人常磐大学  
編集 広報課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1  
Tel.029-232-2511(代)  
<http://www.tokiwa.ac.jp/>



このたびの東北地方太平洋沖地震により、亡くなられた方に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された方々に、衷心よりお見舞い申し上げます。

学校法人常磐大学では、地域に根付く教育機関として、この未曾有の震災に対し全学を挙げて向き合うべく、被災者支援プロジェクト（Tokiwa Victim Support Project）を立ち上げ、これまで積み重ねてきた研究、育んできた人材やネットワーク、施設など、あらゆる資産を活用し、さまざまな取り組みを進めています。

被災した学生への納付金減免措置や被災地からの生徒の受け入れ、国際被害者学研究所を軸としたグローバルな支援体制、心理臨床センターにおけるメンタルサポートのほか、教員による研究面からの支援活動、学生が主体となつたボランティア活動などを継続的に行っています。このような取り組みを通し、復興への道のりの一助となるよう、これからも地域と連携して歩んでまいります。

今回の広報誌は、特別号として、そうした取り組みの一部についてお伝えします。



このたびの東北地方太平洋沖地震により、亡くなられた方に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された方々に、衷心よりお見舞い申し上げます。

学校法人常磐大学では、地域に根付く教育機関として、この未曾有の震災に対し全学を挙げて向き合うべく、被災者支援プロジェクト（Tokiwa Victim Support Project）を立ち

上げ、これまで積み重ねてきた研究、育んできた人材やネットワーク、施設など、あらゆる資産を活用し、さまざまな取り組みを進めています。

被災した学生への納付金減免措置や被災地からの生徒の受け入れ、国際被害者学研究所を軸としたグローバルな支援体制、心理臨床センターにおけるメンタルサポートのほか、教員による研究面からの支援活動、学生が主体となつたボランティア活動などを継続的に行っています。このような取り組みを通し、復興への道のりの一助となるよう、これからも地域と連携して歩んでまいります。

今回の広報誌は、特別号として、そうした取り組みの一部についてお伝えします。



# 明 日 に つ な ぐ 希 望 常 磐 の 復 興 支 援



## 文化財の被災状況調査

国指定の重要文化財も震災の被害を受けました。被災状況調査を行っています。

## 絵本プロジェクト

教員と学生が協力し合い、NPO 法人主催のプロジェクトに参加し、子どもたちに絵本を贈りました。

## 学生プロジェクト

学部・学科の壁を超えて、学生が自主的に復興支援プロジェクトを立ち上げ、活動しています。

## 心理ケアを中心とした被災者支援

国際被害者学研究所、心理臨床センターによるメンタルケアの支援活動が始まっています。

## 就学支援

被災されたご家庭の生徒・学生に対し、経済的支援や就学機会の確保を行っています。

## 主な取り組みの紹介

震災発生直後から始まったプロジェクトを中心に紹介します。法人としての支援のほか、地域に関わる支援、研究資源を生かした支援など、常磐大学の特性を生かした活動を行っています。

# 就学支援



震災によって生活や就学が困難となつた生徒・学生のために、学校法人常磐大学では早急に就学支援の整備を進めました。支援の体制は大きく分けて二つあります。一つは、被災地域にて就学が困難となつた生徒の受け入れ。各自治体や報道機関と連携しながら進めています。もう一つは、法人の設置する各学校に在籍する生徒・学生に対する経済的支援。納付金の减免、義援金の募集などによって、勉学に専念できる環境づくりを支援しています。心の健康のサポート体制にも注力し、子どもたちの健やかな成長と未来のために、教職員が一丸となつて、より安心して学べる学校を目指し、就学支援に取り組んでいます。

## 生徒の受け入れ

在籍または進学する学校での就学が困難となつた生徒に対し、智学館中等教育学校および常磐大学高等学校にて受け入れを行つています。生徒の希望に応じ、最長で各学校を卒業するまでを在学期間とし、納付金免除、寄宿舎の提供のほか、カウンセリングや教員・生徒が協力して推進する人間関係づくりなど、安心感を持つて就学できるよう、さまざまな支援に努めています。2011年8月時点では、男子生徒3人、女子生徒1人が、常磐大学国際交流会館に寄宿しながら智学館中等教育学校へ通学しており、今後も継続して受け入れ体制を推進していきます。



職員が被災地へ出向き、各地の自治体や報道機関と情報共有をしながら、生徒受け入れの呼びかけを行っています。



男子生徒3人は同室で生活しており、保護者の方からも安心との声をいただいています。

## 納付金减免措置・義援金募集

常磐大学・常磐短期大学の在学生で災害救助法が適用された地域に居住または出身の世帯（福島第一原子力発電所の事故の影響を受けている学生も含む）を対象に、経済的負担の軽減や修学機会の確保を図るため、被災の状況に応じて2011年度の授業料など納付金の全額または半額免除を行つています。7月6日、8月2日、9月29日には减免決定通知書の授与式が行われ、常磐大学学生36人、常磐短期大学学生8人に授与されました。授与を行つた諸澤英道理事長からは、「大変だったと思うが、入学時の初心を忘れず、学業に専念し、卒業・就職へとつなげてほしい」と激励の言葉が送られ、授与者の代表学生からは、支援への感謝の気持ちが述べられました。

同時に、被災生徒・学生を支援するための義援金募集を3月14日より9月末まで行いました。一般の方々、同窓会など関係者各位のご厚意により、総額482万7千円が被災した生徒・学生に支給されることとなりました。

### ハリーエインリー高校から 励ましのメッセージが届きました。

常磐大学高等学校と留学交流のある Harry Ainlay High School (カナダ・アルバータ州エドモントン市) から、お見舞いの千羽鶴とメッセージが届きました。「今回、恐ろしい出来事が日本を襲いましたが、私たちはハリーエインリーと常磐の関係はずつと続くものだと思っています。常磐のことはいつも気にかけています。私たちの関係はいっそう強くなり、将来常磐の生徒がカナダに来ること、そして我々が日本に行くことを楽しみにしています。頑張りましょう！」。校長先生や生徒の皆さんからの温かい励ましの言葉に、常磐の生徒たちはとても勇気づけられています。



復興への祈りを込めて折られた千羽鶴は、高校のエントランスに飾られました。

## 心理ケア支援



今回の震災を受け、常磐大学国際被害者学研究所、心理臨床センターでは、被災者のメンタルケアに関する支援プロジェクトにいち早く着手しました。国際被害者学研究所では、グローバルな研究ネットワークを生かし、また心理臨床センターではカウンセリング業務の強化を行い、被災者や復興支援に関わる人のサポートを行っています。常磐大学の研究体制を支援に生かした活動を、今後も積極的に推進していきます。



多くの参加者が集まった基礎的講習。質問や意見が活発に交わされました。  
専門家対象の研修には行政関係の方にもご参加いただきました。



心理臨床センターの講演会。阪神・淡路大震災の例などを挙げられました。  
避難所でアートセラピーを行うアグネス・ターナスキー氏。



心理臨床センターの講演会。阪神・淡路大震災の例などを挙げられました。



心理臨床センターの講演会。阪神・淡路大震災の例などを挙げられました。

学校法人常磐大学は被災者支援プロジェクトの一環として、国際被害者学研究所内に災害対応チームを設置しました。4月、研究所所長であるジョン・ドウ・シッヂ教授の呼びかけにより、サウスカロライナ医科大学などから専門家チームが来日。18日から20日にかけて、被災者の心理ケアに専門家を対象とした研修が行われました。また、19日には地域の方にも広く参加を呼びかけ基礎的講習を実施。100人を超える受講者がメンタルケアの基本を学びました。研修終了後、講師の西尾メリーハー氏とアグネス・ターナスキー氏は、食料と寝袋を携え、宮城県石巻市の避難所で約10日間、支援活動を行いました。研究資産を支援に生かすという研究所メンバーの強い使命感とネットワークによって行われたこれらの活動によって、市町村やほかの支援団体とのネットワークが生まれています。心理臨床センターでは、被災後の不安やストレスなどの心の問題に向き合うため、新たに専用の相談窓口を4月から開設しました。また、7月から常磐市のボリテクセンター茨城に、濱崎武子教授、馬場久美子准教授、清水章江相談員の担当、セントー所属の各臨床心理士を派遣し、被災している失業の方々のカウンセリングを実施しています。さらに、一般に向けた講演会も企画・実施しました。7月24日に、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所犯罪被害者等支援研究室室長の中島聰美氏をお招きし、被災に関連して「大切な人を失った悲しみに向き合う」というテーマで講演をしていただきました。講演会では、心理職に心のケアに取り組んでいます。震災に関わる心の問題に、地域の多くの方が強い関心を持っていることがわかった講演会でした。これを受けて心理臨床センターは、今後も被災された方々の心のケアに取り組んでいます。

## 災害時ストレスへの対処法

### サインを見逃さない

イライラや吐き気、便秘、下痢などの胃腸症状は、心のサインです。早めに専門医にご相談ください。

### ストレスを当たり前のことと受け止める

自分がいまストレス状態にあり、それは当たり前のことなのだと受け止めましょう。

**被災した方、被災状況を目の当たりにした方、ストレス対処法をご紹介します。**

### リラクセーション

目を閉じ、両腕・両足を投げ出して力を抜き、鼻から息を吐くごとに、ゆっくり数を数え、数秒間呼吸を止めてください。

### ストレッチをする

心の緊張と筋肉の緊張は密接に結びついています。柔軟体操や弛緩運動はストレス軽減方法の一つです。







# 学びのTOPIC

## JUNIOR COLLEGE

# 短大

今年も「茨城県ゆうあいスポーツ大会」でボランティア活動を行いました。

5月22日、ひたちなか市・笠松運動公園において、茨城県などが主催する知的障がい児者スポーツ大会「ゆうあいスポーツ大会」が開催され、幼児教育保育学科の1年生が進行の補助を務めました。ゆうあいスポーツ大会は、障がい者スポーツの振興と県民の心身障がい児者への理解を深めることを目的とするもので、陸上競技やサッカーなど10種目にわたる競技が毎年行われています。多くのボランティアが運営支えており、幼児教育保育学科の1年生も毎年サポートとして参加しています。

ンティア活動に携わっており、現在は現代教養講座「心の充実」の中でやうあいスポーツ大会でのボランティア活動を経験しています。「心の充実」は「なぜ常磐短期大学で学ぶのか」という視点から、「一人ひとりが学びの目的や方法を明確にするための科目ですが、その中で、自己と社会とのつながりを感じ、生きる目的を見出すという理念に基づいたプログラムとして、このボランティア活動が組み込まれています。

学生たちは今年も、主催者や支援団体との連携の下、参加者を誘導する係や救護係などを務めました。ほとんどの学生がそれまで接する機会のなかつた障がい者の方のサポートを経験し、最初は緊張気味でした。しかし大会が進行するとともに、人を支えるというボランティアの趣旨を理解し、自ら進んで参加者の手を引いて走るなどの姿が見られるようになりました。最後は全員が参加者と共に歌を歌つたり、声を上げて応援したりと、大会を楽しみながらサポートに回れるようになっていました。また、福祉分野での仕事に興味を持つ学生もあり、将来の可能性を広げるきっかけになったようです。



幼児教育保育学科  
1年 飛田 奈々

幼稚教育の基本に  
通じると実感しました。

人とのつなかりから、  
未来を見つけてほしい。



幼兒教育保育學科  
教授 紙透 雅子



# 学びのTOPIC

## UNIVERSITY

# 大学

6月22日、NHKが展開している「NHK大学セミナー」が水戸放送局と常磐大学の共催で開催されました。「英語でしゃべらナイト」は、日常やビジネスなどのさまざまな場面を題材に、楽しく実践的に英会話を学ぶ人気番組です。当日の司会進行は、人気コメディアンのパックンマックン。コントあり、クイズコーナー「パックン英検」ありで、会場は大いに沸きました。いつもの授業とは異なる角度から、英語を楽しんだ一日をレポートします。

会場は、国際学部英米語学科の全学生のほか、他学科の学生も自由参加で、200人以上の大入りとなりました。大きな拍手とともにパツクンマツクンが登場し、英語をテーマにした漫才ライブからスタート。“L”と“R”的発音の違い、和製英語の面白いボイントなど、軽快なトークで絶妙な笑いを取り入れながらも、分かりやすいレクチャーに学生たちも思わず引き込まれます。続いてのコントでは、発音の違いをめぐったドタバタのやりとりに会場は大きな笑い声に包まれました。

クライマックスは、学生7人をステージに招き、パツクンが英語で出題するクイズに英語で答える「パツクン英検」。見事正解を英語で答えることができた学生もいれば、パツクンとジョークを交わす学生もあり、全員で会場を盛り上げました。

英語を使って笑いが生まれる体験を通して、英語は楽しく対話するためのツールであるということをみんなが実感した90分間でした。

英語の& ポイントは、興味深い「土産検」でステップ大変緊張 マックン(マックン)ながらジ「 きました。 これまで 付けること の基礎にわ 今回の経験を伝えるこ ンに人と△ めて実感し 今後はもつ 英語をツイ で自分の△ 思います。

先音で注意しておきたい  
が散りばめられていて、  
内容でした。「パックン英  
ーボに上がったときは  
しましたが、パックンと  
のユーモアあふれるリー  
ゴもあって、英語で答え  
ヨークを交わす経験もで  
では、文法を正しく身に  
とがコミュニケーション  
なると考えていましたが、  
会話を通して、ニュアンス  
発音の大切さや、オーブ  
することことができました。  
と対話力にも力を注ぎ、  
ールとして活用すること  
世界を広げていきたいと

参加してとても楽しかったという感想が多く、学生たちは英語に対する構えが少しほぐれたのではないかと思う。普段は「英語＝勉強」という意識が強くありますが、今回のようにカジュアルにコミュニケーションをする機会を得て、「英語＝ツール」という意識も育つたと思います。授業ではアカデミックかつ実践的な英語を学びますが、一方で楽しもうとする姿勢も、継続して学んでいく上では重要です。

今回以外にも、授業以外の場でも英語を積極的に使ってもらおうという思いが英米語学科の教員にはあり、「English Smoothie」という英語での会話活動などさまざまな機会を設けています。学生には、英語を学ぶ面白さ、「ワクワク感」を大切に伸びていってほしいと思います。

文法と発音、どちらも大事だと感じた。

英語をもつと自由に  
「遊んで」ほしい。



国際学部英米語学科  
4年 照沼 健太



國際學部英米語学科

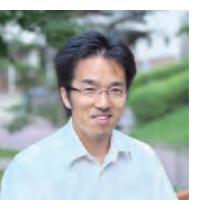
## 女子サッカー部が2年連続で 関東大会に出場しました。

常磐大学高等学校女子サッカー部が、2年連続で県大会優勝、そ

して関東大会出場を果しました。部員数が13人と少ない中でも勝ち進むことができた理由は、部員、顧問、コーチ、3者の信頼関係にあるようです。強いチームワークが育まれている様子をレポートします。



キャプテン  
3年 斎藤 彩音



顧問  
大沼 純一



コーチ  
ジェイソン・コシ

## 学びのTOPIC HIGH SCHOOL 高校



指導は、顧問とコーチが一人体制で当たっています。顧問の大沼純一先生は、「挨拶」「感謝」をキーワードに、自律した心の育成に努めています。また食事面などにも気を配り、部員たちの良き相談相手となっています。コーチのジェイソン・コシ先生は、個々のスキルを鍛えながらサッカーを楽しむ心を教え、チームのムードメーカーとしても慕われています。

練習は、ナイター設備のある常磐大学のグラウンドで毎日遅くまで行われています。時に厳しい指導もなされますが、日頃から精神面のサポートもしっかりと行われているからこそ部員たちは二人に全幅の信頼を置いており、そうしたチームの結束力が強さの秘訣となっています。初心者だった部員も、この環境の下、着実に実力を伸ばしています。

来春からは高校女子サッカーで初のイン

ターハイが行われます。関東大会での一勝、

第一回インターハイへの出場を目指して、常

磐の「なでしこ」たちは日々前進しています。

### 13人は学年を越えた チームメイト。

感謝の心が、  
強いチームワークを  
育てる。

サッカーを  
心から楽しんでほしい。

13人の仲間とは学年を超えて仲が良く、しかし練習では厳しくこともきちんと言い合える関係です。何でも頼られるキャプテンにならうと、一人ひとりを一人ひとりをしっかり行なっているからこそ部員たちは二人に全幅の信頼を置いており、そうしたチームの結束力が強さの秘訣となっています。初心者だった部員も、この環境の下、着実に実力を伸ばしています。

来春からは高校女子サッカーで初のイン

ターハイが行われます。関東大会での一勝、

第一回インターハイへの出場を目指して、常

磐の「なでしこ」たちは日々前進しています。

まず何よりも挨拶や身だしなみをしっかりと行えるように指導しています。自らを律する意識があります。その真摯な姿勢と成長の早さに、指導にも熱が入ります。そんな彼女たちへこの言葉を贈りたいと思います。“It's a Beautiful game.” サッカーは世界で愛されるスポーツです。その真摯な姿勢と成長の早さに、指導にも熱が入ります。が、前回教えたことが次の週できちんとできるようになっていくことになります。いつも驚かされます。その真摯な姿勢と成長の早さに、指導にも熱が入ります。そんな彼女たちへこの言葉を贈りたいと思います。

カーガーができる。一人ひとりが互いに感謝と思いやりの心で支え合うことで、チームの力が高まっていますので、大沼先生にも相談しながら勉強との適切な時間配分を心がけています。服装や礼儀など当たり前に気を付けられるようになりました。将来の自分のためにもなると思います。先生お二人が励ましながら導いて下さるので、練習は厳しさですが、とても楽しいですし、あきらめずに戦える姿勢が身に付きました。次こそは関東大会一勝を目指して頑張ります。

サッカーを通して、何でも頑張れる、どこでも輝ける人になつてほしいと思います。

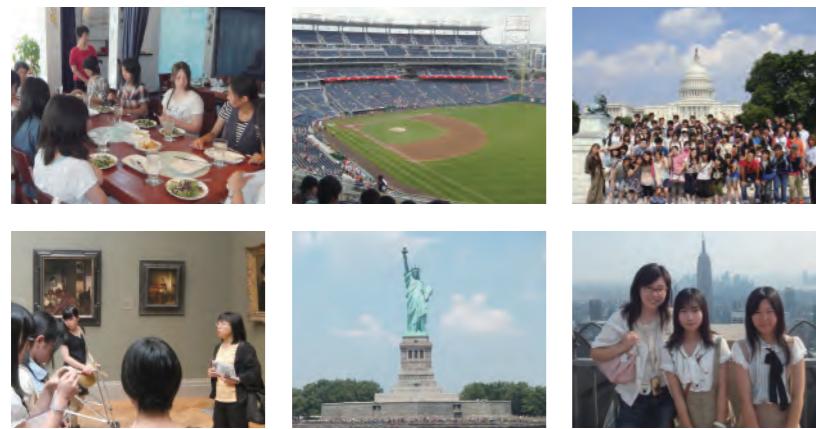
## 学びのTOPIC SECONDARY SCHOOL 智学館

### 8日間にわたる アメリカ海外研修旅行が行われました。

7月7日から14日にかけての8日間、4年次生が学内初のアメリカ海外研修旅行に参加しました。海外研修は、「人間の尊厳を大切にし、世界的視野で考え方行動できる人材を育てる」という智学館の教育理念に基づいたプログラムです。ほとんどの生徒たちが初めて体験する海外。アメリカの政治・経済・歴史を代表する3都市を訪ね、現地の人々と英語で会話する経験を通して、生徒たちは多くの収穫を得たようです。発見と感動に満ちた8日間をご紹介します。

今回の海外研修では、生徒一人ひとりに自分の地平線を広げてほしいという思いを込めて「Expand Your Horizon!」という標語を掲げました。総合学習や英語・世界史などの授業でアメリカの地理や歴史、宗教などについて事前学習を行い、研修に赴きました。現地で生徒たちはあらゆる場面で日本との違いに目を輝かせ、感じたことをいきいきと友達や教員に伝えていました。また、買い物やレストランなどで英語を使って会話をする機会に最初は緊張していましたが、学んだ表現を使って積極的にコミュニケーションを図っていました。今後は、事後学習や智学館フェスティバルなどで成果を報告していきます。

7月7日	成田空港→ダレス空港(ワシントンDC)→リンカーン記念館、ホワイトハウス、アーリントン墓地
7月8日	スミソニアン博物館→ナショナルスタジアムでメジャーリーグの試合観戦
7月9日	国立独立歴史公園→市庁舎→フィラデルフィア美術館
7月10日	ロダン美術館→フランクリン科学博物館→ニューヨークヘリーブルの試合観戦
7月11日	自由の女神→グラウンド・ゼロ→ロックフェラーセンター(トップオブザロック)
7月12日	メトロボリタン美術館→国連本部ビル→五番街で班別研修→ブロードウェイ・ミュージカルの鑑賞
7月13日・14日	ジョン・F・ケネディ空港→成田空港



### アメリカの原動力を 感じた8日間。

念願だったアメリカの地に降り立った瞬間は、感無量でした。ワシントンDCやニューヨークなどの都市を自分で見て歩き、アメリカといふ國の原点や力強さを肌で感じることができました。初めて英語でハンバーガーを注文した時はとても緊張しましたが、うまく通じてうれしかったです。シンガポールからのビジネスマントも話ができ、自分の世界が広がったような感じがしました。自分たちで計画を立てたニューヨーク五番街での班別行動やブロードウェイ・ミュージカル「スピайдーマン」の鑑賞、美術館で世界的な名画に触れることができたことなど、言葉では語り尽くせない貴重な体験をすることができました。これからは英語をさらに一生懸命勉強して、ぜひまたアメリカに行きたいと思います。

見るもの、聞くもの全てが日本と異なるアメリカで過ごした8日間は、生徒たちに多くの学びと感動を与えてくれました。研修を通じて生徒たちは、アメリカの政治・経済・歴史・文化についての理解を深めると同時に、自分たちが住んでいる日本を相対化して捉える視点を得ることができます。今後の英語学習への良い動機づけになりました。また、食事や買い物といった場面で「自分の英語が通用しない」という感動を得られたことがあります。今後も、英語学習への良い動機づけになつたと思います。この研修を通して、生徒同士、そして教員との絆が一層強くなつたと感じています。今回得た経験を、ぜひこれから的生活に生かしていくといつてほしいと思います。生徒たちと共に創り上げた研修は、一生の思い出に残る、充実したものになりました。

アメリカで大きく成長した生徒たち。

見るもの、聞くもの全てが日本と異なるアメリカで過ごした8日間は、生徒たちに多くの学びと感動を与えてくれました。研修を通じて生徒たちは、アメリカの政治・経済・歴史・文化についての理解を深めると同時に、自分たちが住んでいる日本を相対化して捉える視点を得ることができます。今後の英語学習への良い動機づけになりました。また、食事や買い物といった場面で「自分の英語が通用しない」という感動を得られたことがあります。今後も、英語学習への良い動機づけになつたと感じています。この研修を通して、生徒同士、そして教員との絆が一層強くなつたと感じています。今回得た経験を、ぜひこれから的生活に生かしていくといつてほしいと思います。生徒たちと共に創り上げた研修は、一生の思い出に残る、充実したものになりました。

アメリカで大きく成長した生徒たち。

